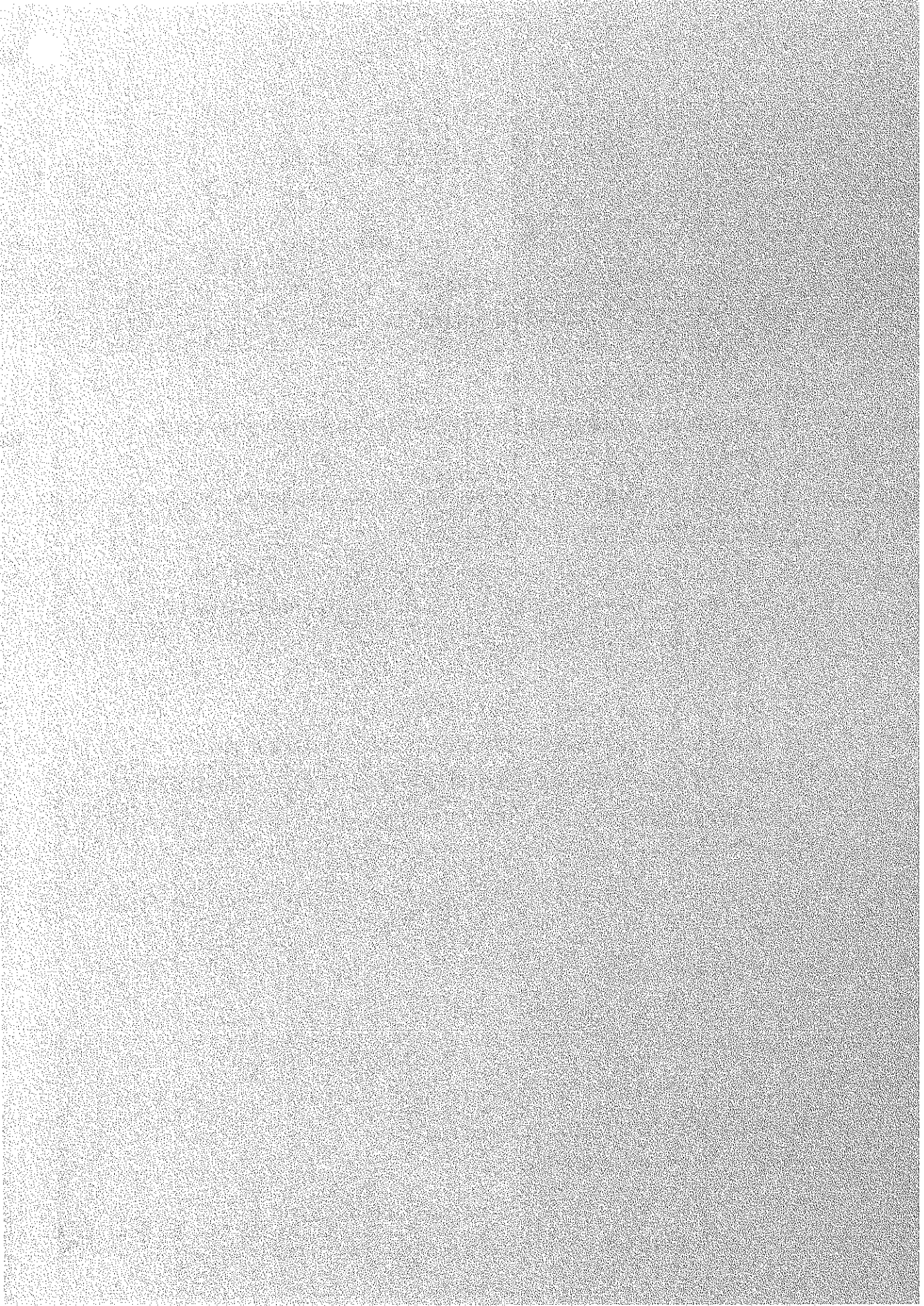


# 2018 年度 入学 試験 問題

## 国 語

(試験時間 15:00~16:00 60分)

1. 解答用紙には、記述解答用紙とマーク解答用紙の2種類がありますので注意してください。
2. 解答は、必ず解答欄に記入およびマークしてください。解答欄以外への記入およびマークは無効となりますので注意してください。
3. 解答は、HBの鉛筆またはシャープペンシルを使用し、訂正する場合は、プラスチック製の消しゴムを使用してください。特に、マーク解答用紙には鉛筆のあとや消しくずを残さないでください。
4. 解答用紙を折り曲げたり、汚したりしないでください。また、マーク解答用紙を記述解答用紙の下敷きを使用しないでください。
5. 解答用紙には、必ず受験番号と氏名を記入およびマークしてください。
6. マーク解答用紙への受験番号の記入およびマークは、コンピュータ処理上非常に重要なので、誤記のないよう特に注意してください。



— 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(50点)

戦争は有限期間の「過程」である。始まりがあり終わりがあある。多くの問題は単純化して勝敗にいかにか寄与するかという一点に収斂<sup>しよくん</sup>してゆく。戦争は語りやすく、新聞の紙面一つでも作りやすい。戦争の語りは叙事詩的になりうる。

指導者の名がヒンパン<sup>(1)</sup>に登場し、一般にその発言が強調され、性格と力量が美化される。それは宣伝だけでなく、戦争が始まってしまったからには指導者が優秀であつてもらわねば民衆はたまらない。民衆の指導者美化を求める眼差しを指導者は浴びてカリスマ性を帯びる。軍服などの制服は、場の雰囲気と相まって平凡な老人にも一見の崇高さを与える。民衆には自己と指導層との同一視が急速に行なわれる。単純明快な集団的統一感が優勢となり、選択肢のない社会を作る。軍服は、青年にはまた格別のいさぎよさ、ひきしまった感じ、澄んだ眼差しを与える。戦争を繰り返すうちに、人類は戦闘者の服装、挙動、行為などの美学を洗練させてきたのである。それは成人だけでなく、特に男子青少年を誘惑することに力を注いできた。中国との戦争が近づく<sup>(2)</sup>と幼少年向きの雑誌、マンガ、物語がまっさきに軍国化した。

一方、戦争における指導層の責任は単純化<sup>(2)</sup>される。失敗が目に見えるものであつても、思いのほか責任を問われず、むしろ合理化される。その一方で、指導層が要求する苦痛、欠乏、不平等その他は戦時下の民衆が受容し忍耐するべきものとしての倫理性を帯びてくる。それは災害時の行動倫理に似ていて、たしかに心に訴えるものがある。前線の兵士はもちろん、極端には戦死者を引き合いに出して、震災の時にも見られた「生存者罪悪感」という正常心理に訴え、戦争遂行の不首尾はみずからの努力が足りないゆえだと各人に責任を感じるようにさせる。

民衆だけではない。兵士が戦列から離れることに非常な罪悪感を覚えさせるには「生存者罪悪感」に訴えるところが実に大きい。親友が、あるいは信頼していた上官が先に逝<sup>い</sup>つたという思いである。「特別攻撃隊員を志願する者は一歩前へ」の号令が背中を押す一因子には、この罪悪感がある。

人々は、表面的には道徳的となり、社会は平和時に比べて改善されたかにみえることすらある。かつての平和時の生活が自己<sup>(3)</sup>

中心、弛緩しな、空虚、目的喪失、私利私欲むきだし、犯罪と不道德の横行する時代として低くみられるようにさえなる。

実際には、多くの問題は都合よく棚上げされ、戦後に先送りされるか隠蔽されて、未来は明るい幻想の色を帯びる。兵士という膨大な雇用が生まれて失業問題が解消し、兵器という高価な大量消費物資のために無際限の需要が生まれて経済界が活性化する。

もちろん、雇用と好況は問題先送りの結果である。日露戦争は外債で戦い、その支払いのために鉄道、塩、タバコを国の専売として抵当においた。太平洋戦争は、国民の貯蓄を悪性インフレによってチャラにすることで帳尻を合わせたが、それは戦時には誰にも思い寄らないことであつた。戦勝による多額の賠償の幻想が宙を漂つていた。

もちろん、戦争はいくら強調してもしたりないほど酸鼻なものである。しかし、酸鼻な局面をほんとうに知るのは死者だけである。「死人に口なし」という単純な事実ほど戦争を可能にしているものはない。戦争そのものは死そのものほど語りえないものかもしれない。それに、「総力戦」下にあつても、酸鼻な局面がすべてに広がり万人の眼にさらされるのはほんとうの敗戦直前である。戦時下にも、戦闘地域以外には「ユウヨ(4)としての平和」がある。実際、B29の爆撃が始まる一九四四年までの内地は欠乏と不自由が徐々に募つていっただけであつた。一九四五年春にも、桜の花を飾り、菊水の幟のぼりを翻(5)してカンコの声の中を特殊潜航艇「回天」を搭載した潜水艦が出撃して行つた。修羅場が待っているのは見送る側ではむろんなかつた。

戦争中および占領期間にも「食糧難を経験していません」という人が農家以外にもいる。軍人でも少佐か中佐以上は特攻隊員を志願させ壇上で激励する側にまわるものらしい（例外はむろんある）。戦時中の社会は、軍官民を問わず、ずいぶん差異が大きい社会であつた。裏面では、徴兵回避の術策がうごめき、暴力が公認され、暴力が横行し、放埒ほうらうな不道德が黙認され、黒社会も公的な任務を帯び、大小の被害は黙殺される。

おそらく、戦争とはエントロピー（無秩序性）の高い状態であつて、これがもつとも一般論的な戦争と平和の非対称性なのであろう。その証拠に、一般に戦争には自己収束性がない。戦争は自分の後始末ができないのである。いや、むしろ、文化人類学で報告されているポトラッチのごとく、喜々として有形無形の貴重な財を火中に投じるのである。

戦争が「過程」であるのに対して、平和は無際限に続くウイ転変の「状態」である。だから、非常にわかりにくく、目にみえにくく、心に訴える力が弱い。

戦争が大幅にエントロピーの増大を許すのに対して、平和は絶えずエネルギーを費やして負のエントロピー（ネゲントロピー）を注入して秩序を立て直しつづけなければならない。一般にエントロピーの低い状態、たとえば生体の秩序性はそのようにして維持されるのである。エントロピーの増大は死に至る過程である。秩序を維持するほうが格段に難しいのは、部屋を散らかすのと片づけるのとの違いである。戦争では散らかす「過程」が優勢である。戦争は男性の中の散らかす「子ども性」が水を得た魚のようになる。

ここで、エントロピーの低い状態を「秩序」と言ったが、硬直的な格子のような秩序ではない。それなら全体主義国家で、これはしなやかでゆらぎのある秩序（生命がその代表である）よりも実はエントロピーが高いはずである。快適さをめざして整えられた部屋と強迫的に整理された部屋の違いといおうか。全体主義的な秩序は、硬直的であつて、自己維持性が弱く、しばしばそれ自身が戦争準備状態である。さもなくば裏にほしのままの腐敗が生まれている。

部屋を整理するためには、片づけられたものを始末しなければならない。現在の問題でいえば整然とした都市とその大量の廃棄物との関係である。かつての帝国主義の植民地、社会主義国の収容所列島、スラム、多くの差別などが、<sup>(7)</sup>そのしわよせの場だつたかもしれない。それでも足りなければ、戦争がかつこうの排泄場となる。マキャベリは「国家には時々排泄しなければならぬものが溜まる」といった。しばしば国家は内部の葛藤や矛盾や対立の排泄のために戦争を行なってきた。

これに対して平和維持の努力は何よりもまず、しなやかでゆらぎのある秩序を維持しつづける努力である。しかし、この免震構造の構築と維持のために刻々要する膨大なエネルギーは一般の目に映らない。平和が珠玉のごとくみえるのは戦時中および終戦後しばらくであり、平和が続くにつれて「すべて世はことなし」「面白いことないなあ」と当然視され「平和ボケ」と蔑視される。

すなわち、平和が続くにつれて家庭も社会も世間も国家も、全体の様相は複雑化、不明瞭化し、見渡しが利かなくなる。平和

の時代は戦争に比べて大事件に乏しい。人生に個人の生命を越えた（みせかけの）意義づけをせず、「生き甲斐」を与えない。これらが「退屈」感を生む。平和は「状態」であるから起承転結がないようにみえる。平和は、人に社会の中にマイボツした平凡な一生を送らせる。人を引きつけるナラティヴ（物語）にならない。「戦記」は多いが「平和物語」はない。世界に稀な長期の平和である江戸時代二五〇年に「崇高な犠牲的行為」の出番は乏しく、一七〇二年に赤穂浪士の起こした事件が繰り返し語り継がれていった。後は佐倉宗五郎、八百屋お七か。現在でも小康状態の時は犯罪記事が一面を飾る。

平和運動においても語り継がれる大部分は実は「戦争体験」である。これは陰面としての平和である。体験者を越えて語り継ぐことのできる戦争体験もあるが、語り継がないものもある。戦争体験は繰り返し語られるうちに陳腐化を避けようとして一方では「忠臣蔵」の美学に近づき、一方ではダンテの『神曲・地獄編』の酸鼻に近づく。戦争を知らない人が耳を傾けるためには単純化と極端化と物語化は避けがたい。そして真剣な平和希求は、すでに西ドイツの若者の冷戦下のスローガンのように、消極的な“*Ohne mich*”（自分抜きでやってくれ）にとつて変わってゆきがちである。<sup>(9)</sup>「反戦」はただちに平和の構築にならない。

さらに、平和においては、戦争とは逆に、多くの問題が棚卸しされ、あげつらわれる。戦争においては隠蔽されるか大目に見られる多くの不正が明るみになる。実情に反して、社会の墮落は戦時ではなく平和時のほうが意識される。社会の要求水準が高くなる。そこに人性としての疑いとやっかみが交じる。

人間は現在の傾向がいつまでも続くような「外挿法思考」に慣れているので、未来は今よりも冴えないものにみえ、暗くさえ感じられ、社会全体が慢性の欲求不満状態に陥りやすい。社会の統一性は、平和な時代には見失われがちであり、空疎な言説のうち消えがちである。経済循環の結果として、周期的に失業と不況とにおびえるようになる。被害感は強くなり、自分だけが疎外されているような感覚が生まれ、責任者を見つけようとする動きが煽られる。

平時の指導層は責任のみ重く、疎外され、戦時の隠れた不正に比べれば些細な非をあげつらわれる。指導者と民衆との同一視は普通行なわれず、指導者は嘲笑の的にされがちで、社会の集団的結合力が乏しくなる。指導者の平和維持の努力が評価されるのは半世紀から一世紀後である。すなわち、棺を覆うてなお定まらない。浅薄な眼には若者に限らず戦争はカッコよく平和は

ダサイと見えるようになる。

時とともに若い時にも戦争の過酷さを経験していない人が指導層を占めるようになる。長期的には指導層の戦争への心理的抵抗が低下する。その彼らは戦争を発動する権限だけは手にしているが、戦争とはどういうものか、そうして、どのようにして終結させるか、その得失は何であるかは考える能力も経験もなく、この欠落を自覚さえしなくなる。

戦争に対する民衆の心理的バリエーションもまた低下する。国家社会の永続と安全に関係しない末梢的な摩擦に際しても容易に煽動されるようになる。たとえば国境線についての些細な対立がいかに重大な不正、侮辱、軽視とされ、「ばかにするな」「なめるな」の大合唱となってきたことか。歴史上その例に事欠かない。

そして、ある日、人は戦争に直面する。

第一次世界大戦開始の際のドイツ宰相ベートマン・ホルヴェークは前任者に「どうしてこういうことになったんだ」と問われて、「それがわかったらねえ」と嘆息したという。太平洋戦争の開戦直前、指導層は「ジリ貧よりもドカ貧を選ぶ」といって、そのとおりになった。必要十分の根拠を以て開戦することは、一九三九年、ソ連に事実上の併合を迫られたフィンランドの他、なかなか思いつかない。

(中井久夫『戦争と平和 ある観察』による)

注 黒社会……犯罪行為をする人々の社会。

ポトラッチ……北アメリカの先住民が自らの社会的威信を高めるために客を

招き、贈与・消費する宴を催す習俗。

〔問一〕 傍線(1)(4)(5)(6)(8)のカタカナを漢字に改めなさい。(楷書で正確に書くこと)

〔問二〕 傍線(2)「失敗が目に見えるものであっても、思いのほか責任を問われず、むしろ合理化される」とあるが、その理由と

してもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 戦争では指導者を美化する宣伝が民衆の中にゆきわたっているため、指導者が失敗したとしても、宣伝の効果で民衆には失敗が目に入らないように隠されているから。

B 宣伝のために、民衆は知らないうちに指導者と自分を同一視するようになり、指導者の行為と自分の行為を区別することができなくなり、客観的批判ができないから。

C 青年層などに向けられた軍国主義教育が進むことによつて、指導者の失敗を批判することが、ほとんどの民衆の間でも許しがたいこととみなされるようになっていいるから。

D 民衆の間に、戦争に勝利するためには優秀な指導者がいてほしいという願望が生まれ、指導者賛美の宣伝にも踊らされ、指導者の本当の姿がみえなくなってしまうから。

E 宣伝で指導者の能力が並外れたものと強調されることにより、指導者が自分たちとはかけ離れた異質で優秀な人間であると民衆が思い込まれるようになるから。



〔問三〕 傍線(3)「社会は平和時に比べて改善されたかにみえることすらある」とあるが、そのようにみえる理由としてもっとも

適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 社会の裏にはびこる不公平や不正が容認されていて、平和な時には問題となる諸課題が無視されているので、いかにも社会がうまく運営されているようにみえるため。

B 社会が戦争勝利を唯一の目標としているので、それ以外の問題はすべて度外視され、戦争が勝利に向かっていく限り、社会がよい方向に向かっていくようにみえるため。

C 戦争遂行に役立つかどうかという価値観しかない戦時では、人々はその目的に合う行為のみをしている振りをして、それ以外の問題が存在しないかのようにみえるため。

D 特攻隊のように自己を犠牲とすることが美德と考えられるようになるので、個人の利益が社会の利益と一致していることが当たり前であるようにみえるため。

E 平和な時代の社会を低くみるのが当然視されることで、平和な時代では解決がむずかしいとされていた課題が、すべて解決されてしまったようにみえるため。

〔問四〕 傍線(7)「そのしわよせの場だったかもしれない」とあるが、「しわよせの場」の意味するものとしてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 秩序の硬直性を変換するために、裏にある負のエントロピーを排泄する場。

B 秩序のもつエントロピーと負のエントロピーを同時に排除してしまう場。

C エントロピーの高い状態を維持するため、ネゲントロピーを整理する場。

D エントロピーの増大を阻止するために、秩序の自己維持性を強化する場。

E 現存する様々な秩序を維持するために、高いエントロピーを放出する場。

〔問五〕 傍線(9)「反戦」はただちに平和の構築にならない」とあるが、その理由としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 反戦の運動は、人々に聞いてもらうために戦争の悲惨さを宣伝することを中心にして、繰り返し宣伝することによってやがて人々に飽きられてしまうから。

B 反戦の運動は、往々にして情緒的、主観的な運動になりがちであり、平和の前提となる社会秩序を維持するという努力につながらないから。

C 反戦の運動は戦争体験を語り継ぐことに重点を置いているために、平和は本来どうあるべきなのかを深く考える努力がしばしば忘れられてしまうから。

D 反戦の運動は人に戦争の過酷さを伝えるために、戦争の実像を単純化したり、極端化したり、物語にしたりしてしまうので、戦争の実像がゆがめられてしまうから。

E 反戦の運動は、自分たちさえ戦争に巻き込まなければよい、という利己的な運動になりがちで、すべての戦争に反対し平和を目指すという原理的立場を取れないから。

〔問六〕 本文の趣旨に従い、「エントロピー」という語句を用いて、平和の継続より戦争が選択される理由を五十字以内で説明しなさい。(句読点は一字と数える)

〔問七〕 次の文ア～オのうち、本文の趣旨と合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えな  
せよ。

ア 兵士は、自分のまわりに戦死者が増えていくことで、自分だけが生き残るのは悪いことだ、という精神状態になり、戦うことが戦死者の命令だと思ってしまう。

イ 戦争の過酷さを知っているのは、戦場を体験した人間たち以外にはないので、体験者の過酷な戦争体験を聞き、語り継ぐことが、戦争の実態を理解する近道である。

ウ 平和な時代には、人々は今の状態が長く続くように思う思考法になりやすいので、未来に希望を持たず、自分を被害者と思ひこんで、責任者探しをしがちになる。

エ 戦争によって、一見失業問題が解消し不況が克服されたようにみえるが、それは見かけだけのものであり、無理な経済政策の失敗は、戦争の終結を早めることになる。

オ 平和が続く時代には、戦時に比べて劇的な事件が少なく、退屈な日常が続くだけと思われ、面白みがないため、平和の貴重さは評価されにくい。

二 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(20点)

ハンナ・アレントは人間が他者との結びつきをみずから断つか、あるいは人々によって断たれて、単独な「一人」になる状態を、孤独、孤絶、孤立という三つの概念で区別している。個人がアトム化された現代の大衆社会では、誰もが単独な一者となる傾向があるが、アレントはこうした単独状態のうちでも、孤独(ソリチュード)<sup>(1)</sup>であるということは、他者との関係を断って、自己と向きあうことと定義している。「孤独の中では実はわたしは決して一人ではない。わたしはわたし自身とともにある」(アレント『全体主義の起源』)のである。

わたしたちは他者とともにあるときには、他者の中の一人として存在しており、自分自身と向きあうことはない。他者と別れて孤独になったときに、初めてわたしたちは自己と向きあうようになる。この孤独のうちでわたしたちは、自分のうちにいる「もう一人のわたし」と向きあう。そしてわたしはこの「もう一人のわたし」とは、それがまるで他者であるかのように語りあう。

たとえばわたしが夜になって、その日のうちに他者に語った言葉や他者にたいして行った行為が適切なものだったかどうかを自問するでしょう。そのときわたしが自問する相手は、語り、行為したわたしそのものではなく、そのわたしの言葉や行為を眺めていて、批判する「もう一人のわたし」である。わたしたちは他者と別れて一人になって思考し、反省するときに、孤独のうちでこの「もう一人のわたし」と対話し始めるのである。

この対話の重要な特徴は、わたしはもはや自分の目から自分をごまかすことはできないということにある。わたしが孤独の対話のうちで向きあう「もう一人のわたし」は、そのようなごまかしを決して許すことはないのである。

ここにはある種の孤独の弁証法のようなものが存在している。他者に向かつて何かを語り、何かを行為するとき、わたしは自分自身に向きあうことがない。そうした行為のうちでわたしは、無心に他者に話しかけ、他者と交流している。これが最初の状態である。次にわたしが他者と分かれて孤独になって、自分の言葉や行為を振り返り、反省するときに、そこに自己への批判的

で否定的なまなざしが生まれる。自分がその日になした無心な行為が、ほんとうに適切なものだったか、「もう一人のわたし」が厳しく吟味し始める状態にはいる。わたしは孤独において分裂するのである。

ただしこの分裂した状態の対話には、それを決定する審級がない。「わたし」と「もう一人のわたし」は、どちらも「わたし」であるために、結論を下すことはできないことがある。この対話は無限につづく可能性がある。そこに孤独の分裂性と多義性が生じる。

この分裂し、みずからのうちに複数のわたしを意識するわたしを、その孤独な分裂性と多義性から救いだしてくれるのは、他者との交流をふたたび始めることだけである。この新たな他者との交流においては、わたしは最初の無心の状態ではなく、「もう一人のわたし」との対話を経験し、自己の分裂を認識したわたしとなっている。この他者との交流によって、わたしは「もう一人のわたし」との対話に、ある決着をつけることができる。

このように、わたしが他者に語った言葉や行為が正しかったかどうかを判断することができるのは、他者に問いかけ、他者と話しあうことによつてだけである。他者と向きあったわたしは、もはや多義的な自己ではなくなっている。他者だけがわたしを一義的な自己とすることができるのである。「まさにこの一者として、交換不能な存在として、一義的な存在としてわたしを認め、わたしに話しかけ、それを考慮してくれることで、わたしのアイデンティティを確認してくれる他の人々との出会いによつて、わたしは孤独の分裂性と多義性から救いだされる」のである。

これに対して孤絶（アイソレーション）という状態は、たとえば何か文章を執筆しているような状態である。文章を書きながら、仕事をしているときには、わたしは自己と対話することも、他者と対話することもできない。「何かを学んだり、一冊の書物を読んだりするためにも、ある程度の孤絶の状態が必要です。他の人の存在から守られていることが必要になるのです」。これはわたしたちが何かに専念するときに、自分も他者も忘却している状態であり、何かを作りだすための条件となるという積極的な意味をもつことが多い単独の状態である。

最後の孤立（ロンリーネス）というのは、他者とのつながりを欲しているのに、それがえられず、他者から「見捨てられた状

態」にあることである。他者との連帯の絆が、何らかの理由で断たれているのがこの状態である。この状態が生まれるのは、「どのような理由であれ、個人的な理由から一人の人間がこの世界から追いだされたとき、あるいはどのような理由であれ、歴史的あるいは政治的な理由から、人間がともに住んでいるこの世界が分裂し、たがいに結ばれあつた人々が急に自分自身に追い返されたとき」である。そのとき、人は自己との対話も、他者との対話もすることができず、一人であることを強いられる。これはつらい状態である。たとえ多数の他者に囲まれていても、砂漠のうちで生きていくような孤立感に襲われるのである。「群衆のうちで孤立していることは、孤独であることよりも辛いのはそのためです」とアレントが語るとおりである。

このような孤立は、いつでもどこでも生じうる「単独性」の一つのあり方にすぎない。しかし大衆社会においては、大衆は「根無し草」として、他者との結びつきを断たれているために、人々はごくたやすく、この孤立の状態に陥りがちなのである。そして全体主義体制は、人々をこのような孤立の状態に陥れることを目指していた。人々が他者と連帯し公的な空間のうちで行動しているときには、全体主義はその威力を発揮できないからである。

そのために全体主義が利用したのが、テロルとイデオロギーという二つの手段である。

(2) テロルは人々のうちに恐怖の種を撒こうとする。全体主義のテロルの特徴は、次にターゲットになるのが誰であるか、まったく予想がつかないことである。明日は我が身であるかもしれないのである。このテロルは人々の間に恐怖心を引き起こす。明日にでも隣人に密告されるかもしれないからである。

民主主義的な国家の法律が原則として目的とするのは、「それぞれの市民の生まれながらの力を制限して、各市民の強さを同一のもののみなすような空間を設定すること」にあつた。この空間が人々の間に存在することで、人々は他者と関係を結び、連帯することができるようになる。しかしこの法律が崩壊すると混乱が生じ、「各個人の強さかほかの市民の強さと結びつきえないばかりでなく、それぞれの力がその対抗力によつて相殺される、すなわち恐怖によつて麻痺させられる」ことになるのである。

アレントは権力というものは公的な空間のなかで初めて生じるものだと考えている。「すべての人間が一緒に行動し始めた

き、この空間の中でいわばおのずから一人一人の人間が権力にあずかっていくのである。しかしこの空間がつぶれてしまうと、人々は孤立し、「権力の成立する空間、すなわち共同で何かを遂行する人間たちの間におのずから生じる共属空間」が失われる。こうして「一切の政治的で公的な領域が消滅する」のである。テロルは、「人間と人間とのあいだの空間、自由というものが成立する空間を、完全に無にしてしまうことによつて、人間たちを一つにする」のである。

この「人間たちを一つにする」ということは、人々の間に統一が生まれるような積極的な意味をもたない。人々が対話をするためには、(3) 空間が必要である。しかしこうした空間が失われると、人々は大きなマッスとなり、「一つ」になつてしまふ。このようにして「一つ」になつた人間たちは、他者と対話することもできず、孤立に追いやられるのである。こうして「全体主義支配は人々からその行動能力を奪うばかりでなく、むしろその反対に、まるで彼らが実はただ一人の人間であるかのように、彼らすべてを全体主義政権が企てているすべての行動、その犯すすべての犯罪の共犯者に仕立てあげ、それにとまなう一切の結果を容赦なく押しつける」のである。

さらに全体主義はこのように孤立した人間たちを支配するために、イデオロギーを駆使する。アレントは思想や哲学と異なるイデオロギーの特徴を次の三点に要約している。第一にイデオロギーはその「疑似科学的な性格」によつて、人々にそれが真理であることを信じさせ、「一切の歴史的に生起するものの全体的説明を、それだけでなく、過去の全体的説明、現在についての全体的な知識、そして未来についての信頼しうる予言を約束する」。イデオロギーは、みずからが反論の余地のない真理であると自称するのである。

第二に、こうした性格をもつイデオロギー的な思考は、「一切の経験に依存しなくなる。経験はこの思考には何一つ新しいことを知らせることができない」のである。これによつてイデオロギーは人々の思考と判断の能力を奪いとることになる。そして人々は、イデオロギーの主張することの正否を、経験によつて判断する方法を奪われる。やがて人々は現実についての知識や感覚すら、こうしたイデオロギーからうけとるようになるのである。

第三に、イデオロギーは人間の経験も感覚も軽視することによつて、「論理的な演繹えんえきだけに専念する」ようになる。そしてあ

る前提を認めると、論理的な推論の力でその帰結にもしたがうことを強制されるのである。

(中山元『アレント入門』による)

注 ハンナ・アレント……ドイツ生まれの政治学者、哲学者(一九〇六―一九七五)。ヒトラー政権成立後フランスに亡命し、のちアメリカに渡った。 全体主義……個人に対する国家・民族の絶対的優位を主張し、個人が全体に奉仕することを強要する体制。ここではヒトラー政権下のドイツの政治体制を指している。 テロル……暴力手段により政治的敵対者を威嚇すること。

〔問一〕 傍線(1)「孤独(ソリチュード)であるということ」とあるが、孤独と他者の関係を説明したものとしてもっとも適当なもの左の中から選び、符号で答えなさい。

A わたしと「もう一人のわたし」の対話は必然的に自己の分裂と多義的な状態を導き、それはいったんは他者によって救済されるが、真にわたしを一義的たらしめるには他者との関係を断ち自身と向きあいなおす必要がある。

B 他者と離れてわたしが孤独になるとき初めて自己に対し批判的な目が生じるが、その「もう一人のわたし」との対話を繰り返すことで客観的な自己像を得ることができ、自分にも他者にも公平な判断を下すことが可能になる。

C わたしと「もう一人のわたし」との対話はあたかも他者との対話に似ているが、それらはいずれも自分であるため終わりのない対話になる可能性があり、わたしが一義的な自己であるためには他者の存在が不可欠である。

D 他者との対話をくりかえすことでわたしは多義的で批評的な目を養うことができるが、交換不能で一義的な自己を発見するには、自身を顧みその際に発生する「もう一人のわたし」との対話を続けていく努力がいる。

E わたしと「もう一人のわたし」との際限のない対話は他者が区切りをつけてくれるが、その他者もまた別の他者とながることで多義性を保証されることになり、このくりかえしによって人間相互の交流が深まっていく。



〔問二〕 傍線(2)「テロルは人々のうちに恐怖の種を撒こうとする」とあるが、本文の趣旨によれば全体主義はテロルを利用してどのような状態を生じさせるのか。その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 人々の孤立感を増幅させて他の公的集団への疑心暗鬼を植えつける。
- B 人間同士の力の相殺をはかって人々を自発的に国家に奉仕させる。
- C 他者との権力関係を崩壊させて法律を機能不全へと追い込む。
- D 人々の力の均衡を保つ空間を解体させて他者との対話を奪う。
- E 他者との連帯を国家権力によって政治的なものへと変容させる。

〔問三〕 空欄(3)に入れるのもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 権力を拒む
- B 人々を隔てる
- C 政治から距離をおく
- D 他者から孤立する
- E 自由を制限する

〔問四〕 本文の趣旨によれば、全体主義体制とはいかなるものか。その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 孤立しやすい現代の大衆社会の中に生きている人々は、テロルにより組織立てられた孤立の状態に編成されることで国家への批判を無視され、さらにイデオロギーに操作されることで政権が企てる犯罪に加担していく。

B 自由や権力が発生する機構をテロルにより破壊されることで人々は大きな集合体と化し、その上イデオロギーによって支配されることで、公権力による強制や洗脳を積極的に受け入れて国家的犯罪行為に参画していく。

C イデオロギーは真理から出発し演繹を積み重ねて反論の余地のない体系的な思想を構成するため、テロルにより恐怖心をおおられ孤立した人々は、経験的に間違っているとわかっていながらもイデオロギーに従っていく。

D 他者は個々のアイデンティティを保証するが、テロルによりその存在意義が弱められ、加えて疑似科学的なイデオロギーによって自己の存在が無価値であると思込まれることで、人々は体制に自ら同化していく。

E テロルにより公的な領域が失われ、人間たちが一つになるとき、他者に囲まれながらも他者との結びつきが断絶している状態が生じ、思考停止に追い込まれた人々はイデオロギーによって容易に政治的に操作されていく。

三 次の文章は『うつほ物語』の一節である。三春高基は大臣であつたが並外れた儉約家であつた。これを読んで、後の間に答えなさい。(30点)

小く病してほとほとしかりけるに、親大きな願どもを立てたりけり。なくなりける時に言ひおきけれど、かかる財の王にて果たさず。その罪に恐しき病つきて、ほとほとしくいますかり。市女、祭り祓へせせむとする時にのたまふ。「あたらものを。わがために塵ばかりのわざすな。祓へすとも打撒に米いるべし。糶にて種なさば多くなるべし。修法せむに五石いるべし。壇塗るに、土いるべし。土三寸の所より多くの物出で来」とてせさせたまはず。

かくて、臥したまへるほどに、まうぼる物、日に橘一つ、湯水まうぼらず、「いたづらに多くの橘食ひつ。核一つに、木一樹なり。生ひ出でて多くの実なるべし。いまは食はじ」とのたまふ。いささかなるものまうぼらで日頃経ぬ。「ここにはあらで、橘一つ食はむ」とのたまふ。五月中の十日ごろの橘、これはなべてなし。この殿の御園にあり。みそかに市女とりて参る。大臣、子、市女の腹に五つばかりにてあり。母を怨じて大臣に申す。「この橘をとりてなむ参りつると申さん」と言ひつれば、粟、米を包みてなむくれたる」と言ふ。弱き御心地に胸つぶらはしきことを聞きたまひて物もおほえたまはず。市女「いと人聞き悲し。このあこ、おのれと腹立ちて、制したまふこととて申したまふになむ」と言ふ。業にやあらざりけむ、御病おこたりぬ。かくて、市女の思ふほどに「高き人につきたれど、わが売り商ふものをこそ、わが身よりはじめて食ひ着れ。わがほどにあたらむ男をこそせめ」と思ひて、逃げ隠れぬ。市女のありて、知らせとかくせしにならひて、侍ひの人々、時々もの申しければ、大臣「朝廷に仕うまつればこそ、人のなきも苦しけれ。畑を作りて、一人二人の下衆を使ひてあらむ」とて、位を返したてまつりたまひ、例なきことのたまふ。「つきなき身にて、高き位用あるべからず。山賤らを従へて、田、畑を作らむ。この位を返したてまつりて、ひと国一つを賜はらむ」と申す。「さもいはれたり」とて、大臣の位をとどめられて美濃国を賜ひつ。

(『うつほ物語』による)

注 小くて病して……高基は幼少期に大病をして。 ほとほとしかりけるに……命が危うかったので。 願ども……神仏

に対するたくさんのお願ひ。 市女……高基が妻にしている商人の女。 まうぼる……召し上がる。

〔問一〕傍線(1)「その罪」の内容として、もつとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 親が大きな願かけをしていたことを知っていたのに、なくなるまでそれをかなえなかったこと
- B 自分の命と引き替えに高基の命を救った親なのに、大臣になった今日まで供養をしなかったこと
- C 親が神仏に祈ったおかげで資産家になったのに、自分ではお祭りやお祓いをしなかつたこと
- D 子どものころに神仏のおかげで命が助かったのに、大金持ちになった後でも御礼をしなかつたこと
- E 妻が高基の病気の治癒を神仏に祈願しようとしているのに、お供え物をしなかつたこと

〔問二〕傍線(2)(3)(5)の解釈として、もつとも適当なものを左の各群の中から選び、それぞれ符号で答えなさい。

- (2) あたらものを
- A もつたいないなあ
  - B 馬鹿げたことだ
  - C 大事なものを
  - D 罰当たりめ

- (3) いまは食はじ
- A 後で食べよう
  - B もう食べないよ
  - C いずれ食べるかも
  - D 今は食べないだろう

(5) 制したまふこと

- |   |             |
|---|-------------|
| A | 朝廷が制定なされたこと |
| B | 自分で抑制なされたこと |
| C | 母親が制止なされたこと |
| D | 大臣が禁止なされたこと |

〔問三〕 傍線(4)「この橘をとりてなむ参りつると申さん」の口語訳として、もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A ぼくがうちの園の橘の実をとってお父さんに食べさせたと、申し上げておこう
- B お母さんがうちの園の橘の実をとって食べさせたのだと、お父さんに告げ口しよう
- C お父さんはよその園の橘を召し上がったのだと、お母さんはおっしゃることでしよう
- D うちの園のたくさんさんの橘の実を、お母さんがとって召し上がったとお父さんに言いつけよう
- E ぼくは、よその園の橘の実をお父さんが召し上がったのだと、うそをつきました

〔問四〕 傍線(6)「逃げ隠れぬ」とあるが、そうした理由としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 大臣との結婚生活にいろいろと不満がたまっていたところ、同じくらしい身分の男性と出会ってしまったから。
- B 使用人たちの世話を普通に行っているのに、不平不満を大臣に告げ口されて妻としての立場がなくなったから。
- C 大臣に養ってもらえない上に、自分が商売をした利益でみんなを養っているので結婚している意味がないから。
- D 折角大臣の地位にありながら、つまらないことを理由に辞職を申し出る夫の気持ちがわからなくなったから。
- E 大臣の極端な性格に加えて、だんだん子どもが意地悪になってゆく家庭の中で生きていく自信を失ったから。

〔問五〕 傍線(7)「知らせでとかくせし」の説明として、もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 大臣が市女に知らせないようにして、いろいろと金品をため込んでいたこと
- B 大臣が使用人たちに知らせないで、いろいろな報酬を支払っていなかったこと
- C 市女が大臣からだと思わせないで、使用人たちにあれこれと物を与えていたこと
- D 市女が大臣に知らせないようにして、あれこれと使用人たちの世話をしていたこと

〔問六〕 傍線(8)「位を返したてまつりたまひ」とあるが、その理由としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 高い位についていると出費がたいへん大きいので、それが精神的な負担であるから。
- B 身分の高い大臣には俸給が出ないので、辞職して商売をした方が得だと割切ったから。
- C 人望も才能もない自分が、大臣のような高い位についているのは不適切だと思ったから。
- D 贅沢な貴族の生活になじめなかつたので、田畑をつくる農民になつてしまいたかつたから。
- E 病気になることで、人生において大事なことは、身分よりも心の豊かさだとわかつたから。



